

令和4年度

コミュニティにおける ソーシャルワーク力強化 研修・長野 2022

—あんしん未来の創造を目指して—
ダイジェスト

令和4年

8月31日(水)～9月2日(金)

会場

RAKO 華乃井ホテル



CONTENTS

- 02 開催目的
- 02 講義プログラムと学びの概要
- 04 特別講演・対談
人に出会い、人に学ぶ 福島県飯舘村が抱えた現実から未来への展望へ
講師：菅野 典雄 氏 対談：上野谷 加代子 氏
- 08 シンポジウム
災害コミュニティソーシャルワークについて考える
長野県における生活支援・地域ささえあいセンターの取り組みを通じて
- 12 参加受講者の事後課題より



主催 社会福祉法人長野県社会福祉協議会



赤い羽根共同募金
配分金助成事業

開催目的

人口減少や世帯の高齢化が進行する日本社会。経済優先の構造に変わりなく、そこからこぼれてしまう個のリカバリーは難しく、社会の包容力が低下しています。こうした社会の状態と個別課題が交錯すると、生活の困難さはより深まり、普段の暮らしが不安で覆われます。私たちは、個の生活課題を把握し、様々な職種や機関と連携しながら、それぞれの暮らしを「あんしん」へとつないでいくことに価値を置きます。そして、多分野を巻き込んだ協働により、一人ひとりの「あんしん未来」を創造するための働きかけをします。それがソーシャルワークの実践です。

本研修は、ソーシャルワークの機能を体系的にとらえたうえで、ミクロ、メゾ、マクロに働きかけるための知識、方法、技術などを学び、個々のワーカーとしての実践力、そして各組織のソーシャルワーク力を高めることを目的とします。

「コミュニティにおけるソーシャルワーク力強化研修・長野 2022」開催要領より

講義プログラムと学びの概要

1 日目
8月31日(水)

オープニング

あんしん未来を創造するソーシャルワーク

協働実践の展開を目指して

上野谷 加代子 氏 同志社大学 名誉教授

空閑 浩人 氏 同志社大学 社会学部 教授



講義Ⅰ

包括的な相談支援のあり方

ライフストーリーに寄り添うソーシャルワーク

空閑 浩人 氏 同志社大学 社会学部 教授

ソーシャルワークを概観し、ソーシャルワークの実践は「あなたは決して独りぼっちではない」ということを知ってもらうことであり、ソーシャルワーカーの存在が、当事者や利用者、地域の人々の「大丈夫」（あんしん未来）となることについて認識を深めました。

講義Ⅱ

気づきから始まるソーシャルワーク

共感力の向上とニーズ把握

川島ゆり子 氏 日本福祉大学 社会福祉学部 教授

ソーシャルワーカーは制度側ではなく本人の側に立つこと、そして断片的な気づきのかけらを統合することがワーカーに求められることを理解しました。

講義Ⅲ

グループワークの機能理解と協働の創出

気づきの共有から協働の取組みへの展開

黒木 保博 氏 長野大学 社会福祉学部 教授（同志社大学 名誉教授）

二人以上のメンバーがお互いに共通の目的を持っていて、そこに相互の関係がある（人間関係がある）グループの理解とそこに働く相互の力の分析に挑みました。

講義Ⅳ

地域医療は『地域』と『生活』に出会えるか

高木 宏明 氏 諏訪中央病院 副院長

地域医療は疾患や病気を臓器ごとに診るのではなく、生活全体を見ることが大切であることを知り、地域福祉との関係性の深さについて共感することができました。

ナイトセッション（参加者交流時間）

ソーシャルワーカーへ送るエール

2日目

9月1日(木)

講義Ⅴ

今後のソーシャルワークの展望

社会福祉政策の変遷とソーシャルワーク

原田 正樹 氏 日本福祉大学 社会福祉学部 教授

これまでの社会福祉政策の変遷を学び、地域共生社会の実現に向けた現在の施策の内容を理解しました。

特別講演・対談

人に出会い、人に学ぶ

福島県飯館村が抱えた現実から未来への展開へ

菅野 典雄 氏 前福島県飯館村長

対談：上野谷 加代子 氏 同志社大学 名誉教授

原発災害で全村避難を余儀なくされた福島県飯館村の前村長より、「モノハカンガエヨウ」という発想のもと、放射能被害に対してどのように向き合ってきたのか貴重なお話をお聴きすることができました。
(→ 4 ページ)

講義Ⅵ

住民同士が支え合う地域づくり

コミュニティ・オーガナイズムの理解とその実践

室田 信一 氏 東京都立大学 人文社会学部 准教授

住民のパワーを集積し、地域変化を達成するために共同して行動を起こすことを目指したコミュニティ・オーガナイズムへの理解を深めました。

講義Ⅶ

職種間連携による救急対応

ソーシャルワーカーの味方づくり

野村 裕美 氏 同志社大学 社会学部 教授

講師から提供された事例について、受講者も自分のことに置き換えながら、共に考える時間となりました。

3日目

9月2日(金)

講義Ⅷ

あんしん未来を創造するための地域福祉『計画』づくり

フューチャー・デザインによる計画作成手法

井上 信宏 氏 信州大学 経済学部 教授

2075年にタイムスリップ。2075年の今、注目されている生活課題や地域課題について皆で共有し、53年前の2022年の人々への要望（リクエスト）について考えてみました。

シンポジウム

災害コミュニティソーシャルワークについて考える

長野における生活支援・地域ささえあいセンターの取組みを通じて

長谷部 治 氏 神戸市社会福祉協議会 地域支援部 担当課長

小野 貴規 氏 長野市社会福祉協議会 地域福祉課「まいさぽ長野市」係長

山崎 博之 氏 長野県社会福祉協議会 総務企画部企画グループ 主査

長野市で起きた令和元年台風災害時における、ボランティアセンターから地域ささえあいセンターでの被災者支援活動をコミュニティソーシャルワークの視点でとらえることについて理解を深めました。(→ 8 ページ)

クロージングナラティブ

ソーシャルワーカーが諏訪で紡ぐ物語

一つひとつの実践があんしん未来を創る

上野谷 加代子 氏 同志社大学 名誉教授

野村 裕美 氏 同志社大学 社会学部 教授



特別講演・対談

人に出会い、人に学ぶ 福島県飯舘村が抱えた現実から未来への展望へ

菅野 典雄 氏 前福島県飯舘村長

対談：上野谷 加代子 氏 同志社大学 名誉教授



菅野典雄 氏

上野谷 ただいまから特別講演です。このプログラムの企画は、メゾからマクロをイメージしました。社会全体の課題に敏感であれ、何ともできない苛立ちと悲しみ、苦しみに耐えながらも一歩ずつ進むソーシャルワーカーであれという気持ちに私はずっとありました。

3.11東日本大震災から11年が経ちました。今日は原発事故による放射能汚染で全村避難^{*}を余儀なくされた前飯舘村長の菅野典雄さんにご登場いただきます。菅野さんは政治家というよりもコミュニティオーガナイザーであったり、コミュニティソーシャルワーカーとして、生活者に視点を置きながら、国や東京電力と交渉を粘り強く進めてこられました。その過程に私たちが学ぶ点が多々あります。それではよろしくお願いします。

● 講演 ●

原発事故による全村避難 どう対応したか

菅野 飯舘村は、5500人ぐらいの人口ですが、原発事故によって全村避難になりました。その後、放射性物質に汚染された土地の除染をしながら、一部の帰宅困難区域以外の避難区域は、解除になって5年が過ぎました。これまでいろいろなことがありました。

原発事故に遭って避難指示が出たとき、私が思ったことを3つにまとめて話をします。

1つ目は、安全だと言われてきた原発の事故に対して、専門家の意見が90度ならいざ知らず180度も違うわけです。安全と言う方もいれば、ダメって言う方がいるわけですか

ら、私たち素人はどうすればいいのかわかりません。つまり百人百様の意見のなかで物事を進めていかなければならないのはとてつもなく大変だということです。

2つ目は、地震や台風など災害は目に見えます。しかし、放射能汚染は目に見えません。目に見えないものへの恐怖は、今、コロナ禍で多くの人が感じているのではないのでしょうか。

東京電力に言ってきたことは、万が一の時にはこれほど危険なものを扱っている会社なんだという自覚を持ってほしいということでした。

3つ目は、起きてしまったことに愚痴を言っても前には進みませんから、国や東京電力と一緒に復興に向けて考えていくことでした。このことで他の自治体とは違った形で復興を進めることができました。

村をゴーストタウンにはしない

避難にあたって考えたことは、飯舘村をゴーストタウンにしたくないということです。放射線量は屋外に比べ屋内はかなり低いので、国と交渉して、例えば特

別養護老人ホーム内での介護や、屋内で仕事をする工場の継続操業などを認めてもらいました。

飯舘村は後発の避難でした。国からは長野県への避難という案も出されましたが、申し訳ないけれどもお断りしました。そして村の職員に、車でおおむね1時間の場所を避難先として探してほしいと依頼しました。結果的には2カ月ほどかかりましたが、90%の方が村から車で1時間の地域に避難しました。

いろいろと考え、できるだけ仕事が続けられ、転校が進まないようにすることを選択しました。ただ、2カ月も過ぎてしまい、「村民をモルモットにするのか」などの批判はありましたが、広い視野で考え、長い目で見ればそちらの方が良かったと思っています。

全村避難中は、村民による24時間3交代のパトロール隊をつくることで国から緊急雇用対策として7億円の補助を得ました。村民の方も避難して無職でいるよりは8時間だけでも村に戻って見回りをする方がよいという考え方です。

*菅野典雄氏プロフィール 1946年飯舘村生まれ。1970年帯広畜産大学卒業。酪農のかたわら、1989年から飯舘村公民館の嘱託館長を務める。1996年10月、村長選挙で当選し、第5代飯舘村長に就任。6期を務める。合併しない「自主自立の村づくり」を進め、小規模自治体の良さを活かした子育て支援や環境保全活動、定住支援などユニークな施策を展開。原発事故時は全村避難の陣頭指揮を執った。2020年10月26日をもって引退。

国との交渉 少しでも実を取るために

国との交渉は数限りなくありますが、3つだけお話をします。

1つは、住民を避難させるときに総務大臣が来てくれましたので、「二重住民票的な考え方を持てるようにしていただかないと村民を安心して避難させられません」という話をしました。残念ながら選挙権と税金の問題から二重住民票は無理でしたが、そのかわりに避難先の自治体に一人当たり4万2000円の特別交付税を交付する制度がつくられました。

2つ目は、村内に大型焼却炉をつくるにあたり、周辺自治体の廃棄物も引き受けてほしいという話がありました。周りは村民が避難をしてお世話になっている自治体です。お互いさまで。私の村は昔からお互いさまでやってきたはずだということで、半年をかけて住民を説得し、他の自治体の廃棄物を受け入れることになりました。

3つ目は、除染土を入れる黒い袋(フレコンバック)の扱いです。村には270万袋という膨大な数があります。村では少しでも再利用する方法を考えました。帰還困難区域の田んぼに線量の低い土を入れ、表面に健康土を50センチほど入れて作物をつくる実験をして、全く問題はないという結果が出ています。

普通ですと被害者の代表ですから、国と徹底的に戦わなくてはならない。それが私の村は、お互いに提案し合いながら理解し合いながら相手の立場も考えながら進めてきました。

残念ながら村民からは「国の手先になってるんじゃないか」「リコールするぞ」、あるいは「東京電力から一体いくらお金をもらっているんだ?」「そのお金でハワイに別荘を建てている」などと極端な話まで出てくるわけです。そうした言葉を気にしていたのでは何もできませんから、少しでも実を取るという考え方で進めてきました。



柔軟性とバランス感覚、 感性を磨くために

考え方として白黒はっきりとした答えがあるのかもしれませんが、もしかしたら白が70点で黒が80点、真ん中が90点だったら90点を狙うのが本来ではないのか。そのように柔軟な考え方とバランス感覚、人間の幅というものがこれからの時代、大切になってくるのではないのでしょうか。

私はこうした柔軟な発想を新聞広告などから学ばせてもらっています。

「バスの来ないバス停」という広告がこちらに来る途中で買い求めた新聞に掲載されました。バス停のイラストの下に次のような言葉が添えられています。

「ドイツのある認知症の介護施設では、徘徊老人の対策で頭をいためていました。ある日、職員の一人が、徘徊してしまう老人のほとんどは家に帰りたという人が多いという傾向にあることに気づきました。そこで職員が施設の前に「バスの来ないバス停」を設置しました。家に帰りたという老人に対して、そこにバス停があるので、バスが来るまで待たれてはどうですかとバス停に案内し、10分ぐらいしたあとにバスが遅れてるようですから、中でコーヒーでもどうですかと言うと、老人は素直に施設に戻るそうです。」

勉強の素材はあちらこちらにたくさんあります。それを気づきながら、自分の考え方として取り入れていくことが大切ではないかと思ってお話をしました。

今まではすべて10分の10で良かったかもしれませんが、時代が変わってきてますので、事によっては1対9とか2対8という少し違う価値観で考えていくこと

も、自分の人生を生きる場面、あるいは仕事の場面が必要ではないかと思えます。

「までいライフ」の村づくりで 危機を乗り越える

今から20年ほど前、村の10年計画を策定するときに「スローライフ」というコンセプトで村づくりができないかという話を職員にしたところ、産業振興をしなくていいのか、道路を作らなくていいのかという意見が出ました。一部の住民からは「役場の悪いところはスローなのに、もっとにスローにするのか」とも言われ、なかなか理解してもらえませんでした。どうしたものか思案していると、ある職員からスローライフを「までいライフにしたらどうか」という提案がありました。

「までい」は福島の方言です。スローライフとは違うけれど、そちらの方がわかりやすいなら、「までいライフいたて」で10年計画を作ることになりました。

「までい」とは真の手。つまり本当の手、両手ということです。お茶を出す時にも「どうぞ」と両手を添えます。丁寧に、念入りに、手間暇を惜しまず、心を込めて、慎ましく、もったいないなど、人間本来のあるいは日本人特有の心のも持ち方が大切であるということが、「までい」です。こうした考えのもとで自信を持って村づくりを進めていたのですが、残念ながら全村避難になってしまいました。

しかし、この考え方が避難にあたってプラスに働いた部分もあるかなと思います。村民もそういうことが大切なことだと理解してもらっていたので、私からの提案について納得してもらいながら事を進めることができました。

次の世代のために ちょっとした生活と心のシェアを

ところで、我々はこれだけ便利な生活をしながらも「もっと便利に、もっと豊かに」ということを考えています。次の世

*飯館村の全村避難 2011年3月の東日本大震災により発生した東京電力福島第一原発事故の影響で、飯館村は高濃度の放射能に汚染され、村全域が計画的避難区域に指定される。以降、その指定は、避難指示解除準備区域、居住制限区域、帰還困難区域の3つの区分に再編され、住民の全村避難が続く。その後、徹底的な除染とインフラ整備の進展により、2017年3月末、帰還困難区域を除く2つの区域の避難指示が解除された。

代やそのまた次の世代に私たちは果たして何を残していくのでしょうか。

例えば、スペインにはこんなことわざがあるそうです。

「多く持っていない人が貧しいのではなく、多くを欲しがめる人が貧しいのだ」。

私たちは悪いことをしてるわけではなく、子孫のために頑張ろうと思っていたことが結果的に子どもたちの大きな負担なり、とてつもなく危ない日本をバトンタッチしてることになっているのではないか。

成長だけがすべてではありません。成熟社会の中でこれからはちょっと成長すれば良いぐらいの考え方を持たないといけないのかもしれない。

そしてもう一つは、心のシェアです。シェアハウスやカーシェアがありますが、分け合うことです。心を分け合う。お互いさまの思いやりがこれからは必要になってくると思っています。

地球は子孫から借りているもの

原発事故後に「地球が2つ必要です」という広告が新聞に掲載されていました。今の生活をしていければ、地球2つ分の資源が必要という内容です。地球は一つしかないからそれに見合う生活をこの機会に考えてみませんかと投げかけています。

古代アテネ市民は、「私たちはこの都市を私たちが引き継いだ時よりも損なうことなく、より良く、そしてより美しくして次世代に残します」という約束をしたと言われます。今から何千年も前の話です。私たちが今、その考え方を持つ必要があるのではないのでしょうか。

ネイティブアメリカンには、「地球は子孫から借りているもので、先祖から受け継いでいるものではありません」という言葉があるそうです。未来に生きる子どもたちから借りているものを汚したり、傷つけたり、壊したりしてはならないということです。

我々はどうしても「もっと便利に、もっと豊かに」と考えがちですが、それがす

べてになると課題を次世代に残すことになります。

全村避難の対応で学んだマイナスをプラスにする発想

先日京セラ・KDDIを創業した実業家の稲盛和夫さんが亡くなりました。彼は仕事とか人生というものは、「熱意と労力と考え方の3つの掛け算である」と語っていました。

能力と熱意は0から100ですが、人によって考え方はマイナス100からプラス100まであります。この200の間では、できるだけプラスの発想を持つことが大切ではないかと思います。

飯舘村は確かに全村避難を余儀なくされました。しかもいまだかつてない放射能との闘いです。地震や台風などによる災害での避難はそれまでもありましたが、放射能によつての避難というのは全く初めてです。

このようなことは、二度と他の人々に経験させたくないという思いがあります。私は10年間、放射能による災害対応をしてきたわけですから。大変なことは多くありました。そしてこの経験を通して私は人間として多くの勉強をさせていただきました。

そのようなことによって今は亡き父と母にもらった命。「精一杯私はやってきたよ、がんばったよ」と言えると思っています。

人々の温かな心に救われて

「ものは考えよう」だと思います。この間、応援も多々いただきました。当時、両陛下が村に来てくださったときに、「までい」の意味を説明させていただいたこともありました。村長を退任するときにも宮内庁から携帯にメッセージが入りました。「大変な中、よくやっていただきました。どうぞ今度は少し休んでください」という上皇、上皇后様のお言葉をお伝えいただきました。

ある時、遺産相続が入ったのでということで80歳ぐらいの女性が飯舘村に500万

円を送ってくれました。「子どものための飯舘っ子未来基金を作っていますので、そちらにお願いできませんか」とお願いしたら、「私は一番苦労してる村民の方々に送ったので、子どもだけというわけにはいきませんのでお許しください」と答えられたので、「わかりました」と受け取らせていただきました。1週間後、またその方から今度は子どものために500万円が送られて来ました。

また、年金が入った時に数千円ずつ毎回送ってくださる方もいました。原発事故の避難は大変なことは確かですが、人の心に触れられるようなとても良い経験をさせてもらいました。これは私だけでなく村民も大なり小なりそういう経験を積んでいると思います。

私は、皆さん方のような福祉に携わる人たちを見ていて、自分にはできない大変な仕事だなどつくづく思います。ぜひ、プラス思考でポジティブに考え、がんばっていただきたいと願っています。

どうもありがとうございました。

Q & A セッション



上野谷加代子氏

上野谷 ありがとうございました。私たちソーシャルワーカーにとっての「心」あるいは「信念」に通じる価値についてお話しいただきました。

ここから受講者の皆さんからの質問を交えて菅野さんとお話させていただきます。

「公正無私」の言葉を胸に

質問① 社協でコミュニティソーシャルワーカーをしています。震災当時、私は中学3年生で卒業式の前日だったことを

覚えています。東北からかなり離れたところに住んでいたの、ニュース映像しか見たことがなく、震災について考える機会が今までなかったと反省し、今日のお話は今後生きてくると思いました。

我々ソーシャルワーカーは、相手の価値観にどれだけ近づけるかが大事になる仕事です。菅野さんのお話を聞いて、目に見えないことを考えることが大事だと強く感じました。

質問は、一人ではなかなかできなかったことも多かったかと思いますが、復興という目的のために、様々な方の協力があつたのかなと思います。そうした人たちと協力して取り組まれた例をもう少しお聞かせいただければと思います。

菅野 この震災後、直接国とやりとりすることが多くありました。そのような中、「人次第」だということがわかりました。村民や職員も大変な状況ではありましたが、前向きに考えてくれる人が多く助けられました。

質問② 今日は貴重なお話をありがとうございました。いろいろな学びが普段のなかにもあることを意識して、常にアンテナを張っていたと思います。

当時は村長をされていた菅野さんも一人の村民であり、被災者という立場もあったと思います。どんなきっかけがあつてご自身のお気持ちを切り替え、前を向いていかれたのでしょうか。

菅野さん 私自身被害者ですが、その代表でもありました。国や東京電力の立場を理解しつつ、できるだけ白黒ではない真ん中のあたりで、村民のために実をとることを考えてきました。いろいろな葛藤がありましたが、そこを乗り越えてきたものは何かというと、村長になった時に支持者から贈られた額に書かれた「公正無私」という言葉かもしれません。私利私欲は絶対するなよということですよ。

何を判断するにも、絶対に私個人にとってプラスだからという考え方はしないということです。この言葉に守られてきたのかもしれない。



課題を明確にして 村民の理解を得る

上野谷 前向きにということの関連で、交渉の過程で、住まい、仕事、教育をより具体的にどのようにしていったのか、お話いただけますか。

菅野 現在人口が5000人を少し切っていますが、そのうち村内に居住している方は1400人弱で、その他移住してきた方が150人ぐらいいるので大体1600人弱が今の居住人口です。全員避難の町村の中では多い方で、それはつまり避難先が1時間以内にあったということだと思います。

住民にわかりやすく伝えることが大切でしたので、5つの課題がありますよという話をずっとしてきました。

1つ目は、除染をしなければ帰れない。放射能を取り除かないと帰れないこと。2つ目は、賠償をしっかりともらうこと。3つ目は、避難をした方の生活を守っていくこと。4つ目は、復興の計画をしっかりと作って住民の皆さん方と進めていくこと。5つ目に子どものこと。教育、学校のことで。

教育は、3つの小学校、1つの中学校、2つの幼稚園を統合して1カ所に、つまり避難によって統合が可能になりました。統合にかかる費用は、国からの補助を確保できました。もともとは小学校、中学校に通う生徒は5、6百人いましたが、今は大体60人ぐらいです。こども園には45人ほどが通っています。その3分の2以上は避難先からスクールバスや村でチャーターしている民間のバスで通っています。他の避難自治体よりは子どもたちの戻りはよくなっています。

仕事については、会社もありますし、

福祉施設もありますから、避難先から皆さん通って来ています。ですから、昼間の人口は2500人ぐらいになっているかもしれません。

前向きな歩みを積み上げ 広い世界と向き合う

上野谷 ありがとうございます。小中一貫校を実際に見させていただきましたが、素敵な校舎でデザインもいい。村民と一緒に、国のお金を上手に獲得しながら村を再興していくという前向きな歩みが形になっています。それを一つ一つ積み上げられたきたことが、成功につながっていると思います。

飯館村はとても文化度が高い村で、それはこの災害の前からの取組です。

質問③ ソーシャルワークの実践がごく狭いものではなくて、地域や、政策にも関わる場所を見ていかないといけないことを考えさせられてきました。

そこで伺いたいことは、一人ひとりの悲しみと、広いところを見ていくことを、菅野さんはどのように折り合いをつけられてきたか教えていただけますか。

菅野 「グローバルに考え、ローカルに行動せよ」という有名な言葉がありますが、なかなか人間そう簡単ではありません。一人一人にコツコツと向き合うことだけがすべてだとすると、どうしても狭くなってしまいます。

自分のいろいろな経験の中や人生の中から、広い視野で考えていくことが必要と思うようになりました。人の話を聞く、あるいは本を読む、新聞を読む、いろんなところを見る、そういう積み重ねをしてきました。今、皆さん方が対応している方に思いを寄せることが、心の通うケアや思いやりのある支援になるのではないかと思います。

上野谷 今日は本当にいろいろな観点のお話をいただきました。これを機会に私たちも、もう一度、震災を振り返り、忘れないようにしましょう。

シンポジウム

災害コミュニティソーシャルワークについて考える

長谷部 治氏 神戸市社会福祉協議会 地域支援部 担当課長

小野 貴規氏 長野市社会福祉協議会 地域福祉課「まいさば長野市」係長

山崎 博之 長野県社会福祉協議会 総務企画部企画グループ 主査

一人の人を救う経験を 社会の仕組みにするために

長谷部 令和元年東日本台風災害のときには、私は5週間にわたって週3日長野に入り、雪が降る間際まで支援のお手伝いをしました。

今日は災害時にどんなコミュニティソーシャルワークが必要なのかを、このシンポジウムで皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

コミュニティソーシャルワークとは何かを改めて考えた時、私は「一人の人を救う経験を社会の仕組みにする」と整理しています。一人の人を救う経験をするだけではなく、気づいたこと、見つけたことを社会の仕組みに変えていかなければいけないと考えています。今回はこのことにも焦点を当てたいと思います。

小野さんと山崎さんにお話いただき、ここまでの振り返りも含めて共有してもらいたいと思います。

小野 令和元年の災害から来月で丸3年になります。いろいろとご支援くださった方に感謝申し上げます。

現場のソーシャルワーカーの立場から、どんなことを大切に実践したかを思い返しながらか、お話できればと思います。

山崎 2004年に隣の新潟県で中越地震があり、長期でボランティアとして活動しました。その後、中越沖地震を経て柏崎市社会福祉協議会に飛び込み、地域福

祉をどっぷりやってきました。2014年に地元長野に戻り、現在に至っています。

台風災害の時は長野市災害ボランティアセンター（以下、災害VC）の運営を支える立場

で関わり、その後、2年間、生活支援・地域ささえあいセンターという復興期の事業に取り組んできました。そこでの実践をアウトプットしていくタイミングでもあるのでお伝えします。

災害 VC の事例から コミュニティワークを体験

長谷部 まずは災害VCでの事例をコミュニティワークと紐づけながら、会場の皆さんに経験していただきたいと思います。

災害VCの運営の手伝いに来ているという想定で、こんな災害です。

「大雪でこれまでの2倍の雪が積もりました。救急隊がソリで緊急搬送を行うなど、交通が麻痺しており、市民生活に支障をきたしています。救急車が走れない状況です。当然ボランティアも職員も車で来ることができない非常に困難な状況です。

災害VCには多くの相談が寄せられますが、しかし、なかなかボランティアが集まれる状況にありません。

こうした中で、大雪で犬の散歩に行けず、犬の体調が悪いので、家の周りの雪



左から長谷部治氏、小野貴規氏、山崎博之

かきをお願いしたいという相談が災害VCに入りました」

あなたならどうしますか。グループごとに話し合って対応を考えてください。

グループ1 そもそもそのお宅で雪かきができない状況があります。犬というよりも、そのお宅が自分たちで雪かきができない状況を考えると、災害VCで対応するか、地域の支え合いの関係性の中でどうにかしてもらうか、なにかしらの支援をしないといけないのではないかと思います。

長谷部 これは平成26年バレンタイン豪雪と呼ばれる大雪で群馬県内に設置された災害VCに実際にかかってきた電話の事例です。

ここで私もお手伝いしていましたが、コーディネーターの20代の女性がこの電話を受け、「ボランティアさんもほとんどいないし、現場に行くにも車が走れないし、犬のために何かができる状況じゃないのでごめんなさい」と言って電話を置きました。その後にはぼろぼろと泣きながら「優先的なニーズでないのはわかっていますが、すごく気になるんです」と私に相談しました。その時の話し方や内容が気になるな

ら、誰かを行かせるよう彼女に指示しました。そして、何とか行ける場所に社協が運営する包括があり、そこの職員が行くことができました。

玄関チャイムを押しても誰も出てこないの、庭に回って家に入ると、おばあちゃんが犬を抱きながら居間でうずくまっていた。どうやら東京にいる娘たちが危ないという理由で石油ストーブを使うことができず、エアコンが唯一の暖房器具でした。

しかしエアコンの室外機は完全に雪に埋もれて暖房が効かなくなっていたのです。この地域はそもそも雪があまり降らないので、雪に埋もれることを想定していません。急いで職員が室外機を掘り出してエアコンを復旧させ、室内の温度を上げたら、おばあちゃんは元気になりました。具合が悪かったのは散歩に行けない犬ではなく、おばあちゃんの方だったのです。

犬の散歩という言葉にすべての判断を委ねるのではなく、その奥に一体何があるのかに気づくかどうかです。一人暮らしの高齢のお宅であるという事実と合わせて考えなければいけないのです。

◎長野市社協における災害支援◎

災害 VC の強みを活かし 福祉的な視点でアセスメント

小野 私からは令和元年の台風災害において社協として取り組んだことをお話しします。長野市は32の行政区に分かれており、その中の6地区が大きな被害を受け、社会福祉法人の施設や公営住宅も被災しました。長野市全体で4000を超える家屋が被害に遭い、直接亡くなられた方の他に、いわゆる災害関連で亡くなられた方もいる状況でした。

私たち社協は長野市と協定を結んでおり、市からの要請により災害VCを立ち上げました。

広範に被災したため、はじめから被災地区に現地の最前線の支援拠点を設けて、それぞれの地域性を生かしながら支援にあたりました。

電話を通じて依頼があったお宅にボランティアに入っただけだけでなく、被災された地域住民の方を含めて、地域の



長谷部治氏

方たちと一緒に活動しました。

そうすると、地域の方から気になるお宅がいろいろ出てきます。

一つの事例として、隣の家が独り暮らしで全然片付けが進まず、仕事もしていないのだというお話がありました。この時、私はソーシャルワーカーとして気になるポイントがいくつかあったので、お宅を直接訪問しました。

いろいろ話をしてみると、精神に障がいがある方で、そもそも何を願っていてよいか分からず、また多くのボランティアが自宅の中に入ることにものすごく抵抗があるとのことでした。

長谷部さんのお話のように、気になるときは実際現場に行ってしっかりと話を聞き、その人の生活状況を見ることで、普段その人がどういう生活を送っているのか、その背景を知ることによって支援が組み立てられます。

この方の場合、結果的にまったく見知らぬボランティアが行くよりも、地域の

人たちの協力を得て、家屋の片付けだけでなく、食事を届けることもお願いしました。

地域の人たちが関わることの効果は絶大で、結果、この方とはメールでいろいろやりとりができるくらいの友人ができ、困ったことがあると、地域の方経由で私宛てに情報を入れてもらえるようになりました。

このように身近なところで関わっている方がいるとその後の支援にもつながっていく例ではないかと思います。

ささえあいセンター開設 生活支援相談員を配置する

その後、長野市社協では、生活支援・地域ささえあいセンターを開設しました。住み慣れた地域から慣れない場所で避難生活される方の孤立予防や災害関連死、自殺の予防、健康上のリスク回避も含めて、アウトリーチをしながら被災された方の見守り、生活相談支援を行っていく事業です。

具体的には、生活支援相談員を配置して、個別訪問を行います。今回の災害では800世帯を超える方々が自宅を離れて生活することになりました。いわゆる建設型で作った仮設住宅が長野市内に4カ所でしたが、入居したのは100世帯ぐらいで、残りの700世帯はアパートを借り上

生活支援・地域ささえあいセンターの活動

◆現況等の調査及び支援方針の作成

- ・戸別訪問によりニーズ把握（生活状況や健康状態等）と課題に応じた支援方針の検討

◆見守り、巡回訪問

- ・見守り、巡回訪問、相談、情報提供、生活支援の実施
- ・住民、ボランティア等による見守り
- ・支援ネットワーク活動の立ち上げ、運営支援

◆専門機関等へのつなぎ

- ・生活課題などへの適切な支援先へのつなぎ及び情報共有

- ・慣れない環境でADLが悪化 ⇒ CM、地域包括支援C
- ・持病が悪化 ⇒ 保健師、医療機関
- ・多重債務 ⇒ 生活困窮者自立相談窓口（社協）、法テラス
- ・転居先がない ⇒ 住宅課、生活困窮者自立相談窓口
- ・再建後のメンタル不調 ⇒ 地域、保健師、医療機関、障害相談支援C

◆コミュニティづくりの支援

- ・サロン活動の実施等被災者住民同士及び避難先住民との交流の促進や地域情報の提供

◆関係機関等との連携

- ・住民組織や関係団体との情報交換や連絡調整及び連携のためのネットワーク化

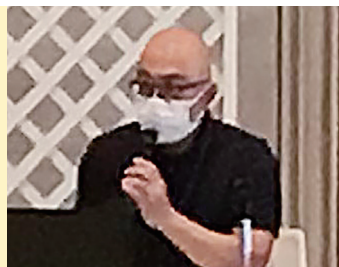
「寄り添う」ことによる安心感

「話せる」ことによる安心感

「つながる」ことによる安心感

生活の場にアウトリーチし、慣れない場所での生活を余儀なくされている被災者に寄り添い、思いを受け止めることで安心感をもって関係を構築するとともに、身近な相談相手として支援や地域につながるきっかけになる。

生活支援・地域ささえあいセンターの活動（小野貴規氏 報告資料より）



小野貴規氏

げて住まわれる方でした。アパートはそれぞれに選んで契約するので、皆さんバラバラになります。長野市から出て近隣の市町村でアパートを借りて住まわれる方もいます。のように点在する世帯を生活支援相談員が訪問しながら見守りを行いました。

生活支援相談員は住民の方が安心して話ができる関係をつくることで初めて「実はこういうことに困っている」といった話が出てくだろうと想定をしましたが、実際、そのとおりでした。

被災に伴う3つの孤立

被災された方は孤立しがちです。今まで生活していたところから離れての物理的な孤立もありますし、精神的な孤立もあります。同じ被災者でも月日が経っていくと、再建の進捗を比べて精神的に孤立していく方もいらっしゃいます。

もう一つ大きな課題だったのが情報からの孤立です。回覧板や立ち話しといったこれまで当たり前に入ってきた情報が地域を離れてしまうと、まったく入ってきません。加えて、その後の再建のための判断材料がなくなります。

この課題に対しても、私たちが地域の情報を孤立された方に届けたり、その方の情報を地域にお届けしたりするなど、慣れない環境で何とか安心感を持って生活できるよう様々な形で支援をしていきました。

住民主体のコミュニティ支援

もう一つ大切にすることは、地域と一緒に動くことです。被災された方も支援を受けるばかりではなくて、自分も支援する側に立つことがあります。

そうした方たちの力を借りながら、住民同士で見守ったりとか、その後の復興につなげられるような動きを一緒に組み立て

たりするなどしてきました。

私たちが日々の仕事の中で、枠内で収まるように支援を組み立てる傾向があると思います。そうではなく、制度を超えて、地域の人や活動などいろいろな社会資源を生かしてつなぐ仕組みづくりが展開できると思います。

泥かきセンターからの脱却

長谷部 ありがとうございます。改めて長野の災害VCは、“泥かきセンター”ではないんだということを常々思っていました。

多くの水害現場で災害VCがやることは泥かきだと思ってしまう時があります。最初から泥かきセンターではなく、被災者の生活を立て直すために様々なことに気づけることを小野さんの報告から学びました。

◎災害CSWから地域共生社会を描く◎

山崎 災害VCは、すごいエネルギーを持った活動となりますが、実は入り口です。この入り口を活用し、小野さんの取組のような長く続く相談支援、ソーシャルワークをどう展開していくかが大切になってきます。私は災害コミュニティソーシャルワークから地域共生社会を描くため、2年半の取組をしっかりとめたいと思っています。

住み続けられる地域、コミュニティの再生へ

長野市災害VCの運営では、2つ大きな目標を掲げました。

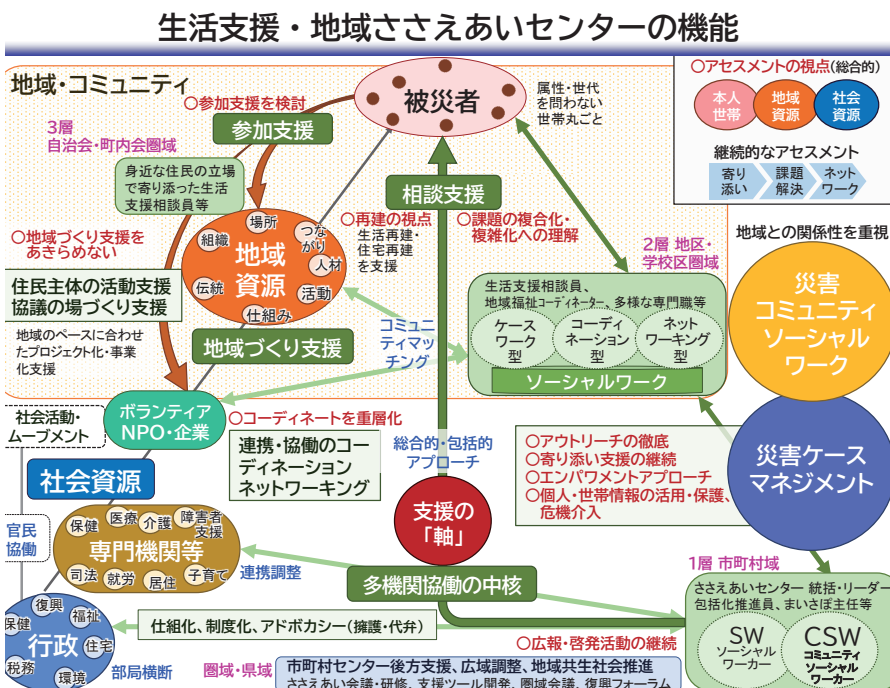
1つ目は、「住み続けられる地域」「コミュニティの再生」です。避難で住民が散り散りになってしまった状況の中、住み慣れた地域にどうやって戻ってきていただく選択肢を広げられるかは、地域福祉の根幹にかかわる部分であり、絶対に譲れないところがありました。

活動を通じてお宅を訪問し、家の中に入ることができ、その方の暮らしぶりや家庭の様子、また地域性も見えてくるので、ソーシャルワークのアセスメントをする絶好の場面となります。そこに至るまでは、対話をして寄り添っていくことを続けていかなければなりません。

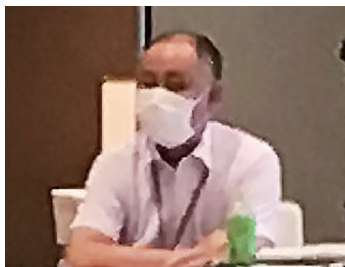
2つ目は、とにかくたくさんの方のボランティアに来ていただきたかったので、現場でできることはリピーターを増やすことでした。

「おもてなしセンター」と称して、さわやかに声掛けをして、また来ていただけるような運営を心掛けました。

個別課題だけではなく、地域全体の課題に対して、たくさんの方のボランティアに集まっていただき、地域の絶望的な風景を変えていくことも行いました。自衛隊とも連携協働し、瓦礫など地域を埋め尽くし



災害コミュニティソーシャルワークの機能 (山崎主査 報告資料〈一部改変〉より)



山崎博之

た災害廃棄物の山をなくしたことによって住民からの依頼を得て、地域への扉が開き、そうなる個別への展開がしやすくなることを感じました。

また、生活支援をすることもそうですし、「住民とともに」が一番大切であると思っています。支援者だけではどうしても被災者との二者の関係性になりがちです。地域の方々も地域に対しての想いがあるので、その想いを大切にしながら展開していくことで、その後の復興期に続く活動につながっていきます。

アウトリーチを徹底した災害ケースマネジメント

災害ケースマネジメントでは、アウトリーチを徹底しました。現地に行きお話を聞き、そこで把握したことをさまざまな機関につないでいくという、日頃の相談援助で行っていることを災害時にも徹底するとともに、そこに地域の視点を私は加えました。

第2層にソーシャルワーカーを配置し、その機能を置くことが、住民とともに地域福祉活動を展開していく中で、とても大切だと思います。

第3層の自治会・町内会圏域の方が生活支援相談員の身分と役割を持って活動されたことによって、参加支援の機能を発揮しました。参加支援は、被災をされた方々を地域資源につながること、そこに三層の方々が役割を發揮しました。

ささえあいセンター 支援の軸づくりの視点

ささえあいセンターは支援の軸として、行政のあらゆる部署や専門機関を参集してケース会議をしながら、本人の気持ちを大切に支援を行っていきます。

災害のときは特に、エンパワメントアプローチが大事です。アセスメントの視点と

して、本人の生きる力、世帯の様子、周囲や地域支援者との関係性を総合的にを行います。災害VCは自宅に入ることができるので、このアセスメントがとても大切です。

課題の複合化・長期化は、災害だけではなく、日頃の福祉活動の中でもあることかと思っています。

つなぎ支援は、必要に応じて課題の具体化、見える化を図って関係機関につなぎ役割を持つということです。

地域づくり支援を諦めないことも大切です。住民の皆さんが地域に対する想いを諦めそうになることもあるので、そこを下支えをし、そして「戻る」復興ではなく、さらに飛躍させる「創造的」復興を目指すため、住民を支え続けてエンパワメントアプローチをしていく必要があります。

困った時に頼れる人の顔が 思い浮かぶ地域づくりを

長谷部 ありがとうございます。2人からお話をいただきました。山崎さんも触れていましたが、被災者への支え合いの活動と生活支援コーディネーターの通常の活動との違いを現場感覚として小野さんから話しいただけますか。

小野 ささえあいセンターは、そもそも被災に伴う制度なので対象や事業内容がかなり明確です。生活支援コーディネーターがものすごい力を發揮して、復旧はもちろん、その後の復興に今もつながっている地区もあれば、なかなか機能しづらかった地区もあります。

長谷部 コミュニティソーシャルワーカーが普段の活動から地域や個別の課題を見て、災害時にも力を發揮すると思いますが、電話での依頼を受けてボランティアを紹介するような災害VCと、コミュニティマッチングでコーディネーションしていく災害VCのどちらがやりやすいか話したいでもよろしいですか。

小野 災害時は、行政も含めて通常であれば機能しているものも機能しなくなる場合があります。機関として機能しない、人として機能しないこともあります。災害時は、待ったなしでもあるので、その時は地域のなかで動ける人とつながり、いかに最大効果を生むかはコミュニティソーシャ

ルワーカーの力量次第です。地域の資源を普段から把握していて、いざという時に頼りになる人を把握できていることが前提になります。

私たちは一括りに地域と言いますが、困った時に頼れる人の顔が思い浮かぶかが大事だと思います。

長谷部 山崎さん、アセスメントの視点が私は気になっていて、周囲との関係性が悪い時のアプローチの仕方を少しお話しいただくとコミュニティが枠的に見えるのかなと思います。

山崎 大前提としてアウトリーチによる訪問をし、本人との関係性を築くことが必要です。一対一の関係が築くことができれば、個に入っていきますが、災害の時は様々な支援者が来ているので、連携・協働によって本人へのアプローチをすることが大事かと思っています。

コミュニティソーシャルワーク の機能をあらゆる場で

長谷部 災害VCやささえあいセンターの運営に今後ICTの力が入ってきてますが、ニーズ把握に関してはICT化してはいけないのではないかとされます。つまり、心配な人や困ってる人の言葉には、その背景があります。

本人が自分に必要なサービスが何かを必ずわかっているとは限らないので、ICTでのニーズ把握は成立しないと思います。本人がやってほしいことを選ぶだけならば使えるかもしれないけれども、そこに至るまでの背景があるニーズはICTで把握することはできないと思っています。

私は、コミュニティソーシャルワークの機能が社協に限らず、様々なところで發揮されていくことが、依頼者の気持ちや困りごとを支えることに寄与するのではないかと考えます。

災害VCのためではなく、その先にある被災者の生活を支えていくことにも絡んできますので、ぜひ皆さんの力を災害があったときにも、普段にも積極的に發揮していただけることを願い、今日の結びのメッセージにさせていただきます。

参加受講者の事後課題より（抜粋）

最 先端で福祉をリードする講師陣の熱い講義とグループワークにどっぷりと浸かった贅沢な3日間。あらためて仕事に向き合うことができ、しなければならないことが見えてきました。

こ の研修に参加したこと自体、これからの地域での活動に勇気がもてる雰囲気を感じた。

3 日間の研修にもしっかりとストーリーが感じられ、毎年伝えたいテーマがはっきりしていることは、参加する側も学ぶ目的を持って参加することができます。

講 師の先生方や他のソーシャルワーカーの熱い話を聞いて、ソーシャルワークってこういうものだったよな、こういったことがやりたくて社会福祉士を志したんだよな、と熱い気持ちがよみがえってきました。

初 心に戻るような感覚とスキルアップしている感覚の両方を得ることができ、ワーカーとしての元気をもらうことができた。また、他市町村や県外の方と知り合い、話すことで貴重な情報や人脈など、かけがえのない財産を得られた。

気 づきのたねがちらばっていて、目に見えないものにも気がつくことが大切だということを学んだ。自分のかわりに気が付けてくれる人を探すことも必要、頼り上手にもなれるように、日々、アンテナをはって業務に携わっていきたいと思った。

個 に対する小さな気づきやひっかかりから地域や社会を変容させていく力の生み出し方まで、ミクロ・メゾ・マクロの各レベルでの重要な視点について幅広く学ぶことができ、とても有意義な研修でした。

現 在の業務に結びついた学びが多かったので、迷った時には本研修の資料を再度確認していきたいと感じた。

研 修を受講し、個々の実践を積み重ねていくことで、連携・協同が生まれることや、ソーシャルワークの発展や『社会』の編み直しへと繋がっていくことを学びました。

日 々の相談業務の中で、「なぜこの行動をとったのか」「なぜこの言葉を言ったのか」と気になることがあります。これまでの背景や経験を知ろうとする視点を持つことを改めて考えるきっかけとなりました。

学 びの大切さ、共に学ぶ仲間がいることの心強さを感じました。「学び」は自分のため、「実践」は住民のため、今回の学びを日々に業務に活かしていきたいと思います。

管 野さんの講演は、忘れかけていたことを思いださせてくださいました。ソーシャルワークには、柔軟な発想やアンテナの高さ、多様性の尊重は必要不可欠であり、同時に自身に足りない部分でもあったと気づくことができました。

Special Thanks

協力



一般社団法人 日本ソーシャルワーク教育学校連盟



社会福祉法人 長野県共同募金会



公益社団法人 長野県社会福祉士会

長野県社会福祉法人経営者協議会

令和5年度 コソ研・長野 2023 開催のお知らせ

開催日 令和5年 8月31日(木)～9月2日(土) 予定

会場 深志神社 梅風閣（松本市）